

**E - 29** 知的退行を認め RT-PCR 法にて髄液および末梢血単核球から麻疹ウイルスの genome を検出した難治性てんかんの一例；（第2報）野生株の検出と high dose gamma-globulin 療法の効果について  
東京医科大学小児科<sup>1</sup>、同精神神経科<sup>2</sup>

宮島祐<sup>1</sup>、河島尚志<sup>1</sup>、星加明德<sup>1</sup>、荻原正明<sup>1</sup>、王傳育<sup>1</sup>、Yuan Li Pin<sup>1</sup>、山田直人<sup>1</sup>、木ノ上啓子<sup>1</sup>、武隈孝治<sup>1</sup>、松野哲彦<sup>1</sup>、小穴康功<sup>2</sup>

〔目的〕我々は昨年度本学会で RT-PCR 法にて麻疹ウイルスの genome を検出した難治性てんかんの男児例を報告した。今回、麻疹ウイルスの genomic analysis の結果と合わせ、high dose gamma-globulin療法により治療効果が認められたので報告する。

〔症例〕15歳、男児。麻疹は予防接種を1歳7か月時に受けているが自然罹患歴はない。6歳時急性脳炎による複雑部分発作重積をみとめ、PHT 急速飽和療法にて抑制。約2か月後より意識減損を伴う一点凝視、左顔面から左上肢に広がる partial myoclonus、四肢の myoclonus、左側優位で上肢を挙上する強直発作の反復出現、ときに転倒発作を認めるようになる。種々抗痙攣剤に抵抗し、当初 IQ 98なるも次第に知的退行を認め、今回治療前には自発言語に乏しく、書字不能、排尿自立なし。片麻痺は認めていない。脳波では覚醒時から右前頭部焦点性棘波、不規則高振幅徐波のほぼ連続的出現、睡眠ではさらに全般性棘徐波、多棘徐波を認めた。MRI-CTで右前頭部優位の軽度脳萎縮、SPECTでは両側前頭部の血流低下を認めた。14歳時施行の RT-PCR 法にて髄液および末梢血単核球から麻疹ウイルスの genome を検出した。その塩基配列は 85-89年前後に流行した麻疹ウイルスの野生株と一致したが、髄液麻疹抗体価陰性、オリゴクロナル IgGバンド陰性であった。Inosiplexおよび 100mg/kg の gamma-globulin療法は無効であったが、200mg/kg の gamma-globulin療法では発作頻度に変化はないが、自発言語や周囲への関心がみられ、覚醒時前頭部棘波および徐波は消失した。

〔考案〕本症例におけるてんかんと麻疹ウイルスの関連は不明であるが、麻疹ウイルス野生株の不顕性感染を起こしていたこと、high dose gamma-globulin療法で効果のあったこと等から本症例の免疫学的異常が示唆される。

**E - 30** 予後良好な側頭葉棘をもつ複雑部分発作例の治療経過（報告1）

東京医科大学精神神経科<sup>1</sup>、小児科<sup>2</sup>、篠崎病院<sup>3</sup>

○小穴康功<sup>1</sup>、金子雅彦<sup>1</sup>、新井千秋<sup>1</sup>、滝田泰彦<sup>1</sup>、清水宗夫<sup>1</sup>、星加明德<sup>2</sup>、松野哲彦<sup>2</sup>、荻原正明<sup>2</sup>、宮島祐<sup>2</sup>、加瀬裕之<sup>3</sup>、篠崎正純<sup>3</sup>

てんかん治療が治癒の方向性を目指しているとするれば、その治癒過程及び治り方の検討は意義のあることと思われる。そこで難治例が多いと考えられている側頭葉てんかんの中から抗てんかん薬によく反応し、予後良好な経過をとった症例を選択し、臨床脳波学上の特徴があるかどうか検索した。症例は演者らが治療に関わった150例の側頭葉てんかんの中から、予後良好な治療経過を示した6症例である。症例1、18歳男性、初発は14歳である。15歳時、単純部分発作及び複雑部分発作が連日出現した。当科へは平成4年10月受診した。脳波を記録したところ右側側頭葉棘が頻発していたが、MRI、SPECTでは異常所見を認めなかった。CBZ 600mg、PHT 200mg、ZNS 200mg等投与し、発作は消失した。平成5年1月以后服薬中止しているが、脳波は正常になり、現在まで発作を訴えていない。症例2、29歳男性、単純部分発作、複雑部分発作初発は26歳である。平成3年に当科初診し、脳波を記録したところ右側側頭葉棘を認めた。PHT 200mg、ZNS 300mg投与後、発作頻度は週1回から月2回と漸次減少し、発作が消失した。平成4年3月に本人の意志で断薬したが、現在まで発作を訴えていない。MRIは正常、2年後の脳波では正常所見を示したため、治癒症例と判断した。症例3、59歳女性、主婦。単純部分発作、複雑部分発作初発は52歳時であった。自律神経発作、意識減損発作を伴う自動症が連日出現した。脳波は両側独立性側頭葉棘が頻発していたが、左側優位であり、MRIは正常所見を示した。CBZ 600mg、PHT 300mg、VPA 800mgで発作は消失し、現在まで6年間無発作が続いている。症例4、16歳女性。てんかん発作初発は13歳であり、左側優位の両側独立性棘が頻発していた。CBZ 600mg投与で現在2年間無発作である。症例5、6はやや異なる治療経過を示した。6症例のため、明らかな結論は差し控えたが、治療過程に異なるタイプがあると推定された。